



令和8年10月1日
校長 富川 麗子

「記念」ではなく「祈念」～創立二十周年と彫刻家・北村西望～

二十周年を迎え、一人の彫刻家の話から

本年度、本校は中等教育学校となって二十周年を迎えました。この二十年をどのような言葉で、生徒の皆さんに語ればよいのか、私は考えていました。そのとき思い浮かんだのが、長崎の平和公園に立つ一体の大きな銅像です。右手を空に向かって真っすぐ上げ、左手を水平に伸ばした姿。高さは九・七メートル、重さはおよそ三十トン。実際に見たことのある人もいかもしれません。

あの像を彫ったのは、北村西望（きたむら せいぼう、1884～1987）という彫刻家です。そして、本校の中庭に、本校の前身である第一東京市立中学校の初代校長・成田千里先生の銅像があります。この銅像を制作したのも、北村西望氏なのです。

さて、長崎市から制作を委嘱されたとき、西望氏は六十六歳。像が完成したのは、七十歳のときでした。西望氏は、はじめ教員を志して長崎師範学校に進みました。ところが病気のために学業を続けられず、退学して郷里に戻ります。療養の日々のなかで、西望氏は父が建てた隠居所の欄間を彫りました。それが周囲の目に留まり、勧められて翌年、京都の美術工芸学校の彫刻科へ進みます。教師になるはずだった青年が、病の床で手にした鑿（のみ）から、百二年の生涯が始まったのです。思いどおりにいかなかったことが、次の道の入口になった。この点だけでも、私は生徒の皆さんに伝えたいと思いました。

「記念」ではなく「祈念」——一字を選び直す

長崎市が西望氏に依頼したのは、はじめ「記念碑」であったと伝えられています。しかし西望氏は、それは「祈念像」でなければならない、と主張しました。記す、のではなく、祈る。起きたことを後ろ向きに記録するのではなく、これから先を前向きに願う。西望氏自身も、最晩年の作品に添えた説明文のなかで、「平和記念から平和祈念へと進展したのであった」と書き残しています。

完成した像の台座の裏には、西望氏の手で次の内容が刻まれています。「右手は原爆を示し 左は平和を 顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」。上げた右手は過去を指し、水平に伸ばした左手は未来へ差し出されている。一字を選び直したことで、この像の意味そのものが変わりました。

本校の二十周年も、同じでありたいと思います。過ぎた二十年を「記念」するだけの日ではなく、これからの二十年を「祈念」する日に。式典で皆さんと一緒に考えたいのは、そのことです。

あの像は、一円玉でできている

もう一つ、ぜひ知っておいてほしいことがあります。あの像の建設費は三千万円だったと言います。その財源のすべてが、一般に募られた寄付金であったと言います。

全国の高等学校・中学校・小学校の教職員と生徒たちによって「一円拠出運動」が行われた、といわれています。さらに南米、北米、ハワイ、タイなど、海外の人々にも協力が仰がれました。九・七メートル、三十トンのあの像は、国の予算でも一人の資産家の寄付でもなく、皆さんと同じ年頃の生徒が出した一円玉の積み重ねによって立っているのです。

本校の二十年も、まったく同じだと思います。創立以来支えてくださった保護者の皆さま、同窓生の皆さま、地域の皆さまの、一人ひとりの小さな力が積み重なって、今日という日があります。

たゆまざる歩みおそろしかたツムリ～都内で「会える」西望氏の作品、そして探究へ

西望氏には、生涯変えなかった座右の銘があります。「たゆまざる歩みおそろしかたつむり 自分は天才ではない。他人が五年でやることを十年かけてでもやる」。カタツムリの歩みは遅い。けれども、止まらない。だから恐ろしいのだ、ということです。東京美術学校の教授職を辞した五十九歳からが、西望氏にとってはむしろ本番でした。最後の作品「平和を祈る」を完成させたのは百二歳のとき。台座には「平和を祈る 百参才西望」と刻まれ、その二か月後に西望氏は世を去りました。最後まで、止まらなかったのです。

その西望氏は、長崎の人であると同時に、東京の彫刻家でもありました。大正十一年から北区西ヶ原に長く暮らし、昭和二十八年から亡くなるまでの三十四年は武蔵野市の井の頭で過ごしています。井の頭自然文化園の彫刻園には、長崎の像の石膏原型（高さ九・七メートル）と、制作当時のままのアトリエが今も残っています。銀座の数寄屋橋公園に立つ「燈臺」は関東大震災十周年の震災復興記念塔で、台座の銘板には「不意の地震に不断の用意」の一文があります。北とびあの正面玄関前、飛鳥山公園、港区役所前、三鷹駅北口。西望氏の作品は、都内で実際に見ることができます。

ここから先が、探究の入口です。なぜ「記念」ではなく「祈念」だったのか。なぜ像は観音でも女神でもなく、人間そのものの姿だったのか。台座に刻まれた言葉は、何を言おうとしているのか。戦前に軍人の像を彫った彫刻家が、戦後に平和の像を彫ったのはなぜか。都内の作品を実際に訪ね、制作年の順に並べてみる。答えの決まっていない問いばかりです。だからこそ、調べ、歩き、考える価値があります。「九段探究プラン」が育てようとしているのは、こうした身近な場所から立ち上がる問いです。

本校は今年、創立二十年を迎えました。カタツムリの歩みで言えば、まだ歩き始めたばかりです。速く進むことよりも、止まらないことを大切にしたいと願っています。生徒の皆さんの一步一步が、次の二十年をつくっていきます。「豊かな心 知の創造 未来貢献」という本校の教育目標は、式典の日だけでなく、日々の一歩の積み重ねの中に生きています。保護者の皆様、地域の皆様、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

